

武者英二先生を偲ぶ：建築そして沖縄の民 家と集落空間を求めて

永瀬, 克己

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2015-03

武者英二先生を偲ぶ

（建築そして沖繩の民家と集落空間を求めて）

永瀬 克己（沖繩文化研究所兼担所員）

昨年二〇一二年も押し詰まった一二月二〇日、沖繩文化研究所元所長を三回務められ研究所に大きく貢献された武者英二先生が逝去された。私にとつては本当に突然のことゆえ、言葉もでなかった。実はこの日先生と会うことになつていたからである。先生には渡すものがあり、そのことはすでに先生と電話で話をしていた。出かける前、確認のためにと携帯に電話をするが通じなかった。何処かへ出かけられたのではないかと思い、時間をおいてかけ直してみたが同様であった。VTRを渡し報告と近況をお話するだけなので、翌日にでも連絡して何うことにした。帰宅しパソコンを開くと「至急連絡」の文字があり、そこではじめて訃報を知った。

VTRとは、一九八三年一二月、NHKの日曜美術館で「沖繩・未完の設計図―建築家・金城信吉―」として放映したもので、その解説を武者英二先生が行っているものである。沖繩復帰四〇周年の年末二〇一二年一二月一日、沖繩地域での放映であるが再放送した番組である。NHKの当時のプロデューサーからの問い合わせで、先生との仲立ちをしたことから、報告を兼ねてお見舞いの約束をした。その番組は、四九歳で早逝した沖繩の建築家金城信吉の人と作品を、先生の解説を交えて原点を伝えようとするものであった。柿葺き風赤瓦材屋根の美しい那覇市民会館／

一九六七、沖縄国際海洋博覧会沖縄館／一九七四、沖縄の家／一九七八、沖縄国
 体陸上競技場／一九八七などは、彼の代表的な作品である。

武者先生ともども建築家金城信吉さんのお宅に伺ったことがある。そこで見せ
 てくれたのは、離島にあるという数々の民家の写真である。コントラストのある
 モノクロームの四つ切写真束であり、非常に力強いものであった。宿泊施設の少
 ない離島の民家ということから、金城さんは、休日を利用してテント持参、泊ま
 り込みでそれらを見て回っていたようだ。こんな風景をよくぞ捉えたという衝撃
 があった。その衝撃はその後のわれわれの研究にもつながることになる大地を掘
 り込んだ村、渡名喜島の写真も多く含まれていた。後々何年にも亘つての研究成
 果を渡名喜村に返すことで、村は、竹富島に続く沖縄で二番目の重要伝統的建造
 物群保存地区につながった。

沖縄という風土にある民家の原点、原空間とはなにか。それを熱く語り合った
 夜が思い出される。そして海勢渡豊さんのギター酒場で酔うほどに踊りながら
 「島は見いらんな（シマの原空間とは何かはまだ見つかっていないことか?）」
 と発していた金城さんの姿も武者先生とともに走馬灯のように蘇った。

—— 出会いから

先生とは、私の大学院時代、自主的なゼミナールであるI M O研（若手非常勤
 講師の稲葉武司、武者英二、小能林宏城の頭文字をとったもの）があり、そこで



図1 忍野工房／武者英二設計

作図：永瀬克己

初めてお会いした。その縁で後に共立女子大学非常勤講師として三十年ほどの長きに亘り稲葉先生とは関わることになるが、この研究会では、先生方と自主的に集まった学生達で都市問題を人間の視点から掘り下げ研究していた。

その後、今日まで四十年程お世話になったのが武者先生である。先生の高校山岳部の先輩で、ボストン美術館帰りの陶芸家會田雄亮氏が、建築家の芦原義信氏と仕事をしており、陶芸家ゆえ建築の図面等は描かないので、建築に関わる作品の仲立ちをしてくれるスタッフを求めているとのことから武者先生の紹介で會田先生の研究所へ。そこでも武者先生とは、何かとつながっていた。會田先生の工房を武者先生が設計（図1）、また武者先生の協力を得ねばならなかった巨大な構造物である山梨県小瀬の国体モニュメントなどは、設計や現場などで仕事をともに行った。

會田研究所での仕事を二年ほど行った後、武者先生より法政大学で助手を求めているのでやらないかという声がかかり、小金井キャンパスに戻ることにになった。建築学計画系全般の教室業務サポートだけではなく、武者先生が設計することになった工学部体育館（図2）、工学部学生ラウンジやサンクンガーデン、計算センター、多摩工学部棟（現スポーツ健康学部棟）の設計にもかかわり、多くの図面と格闘することになる。武者先生の設計姿勢は、エスキス（途中のスタディ）はもとより、透視図、一分の一の原寸図まで、締切直前でひっくり返ることもあった。納得するまで描くということであり、設計に携われることはうれし

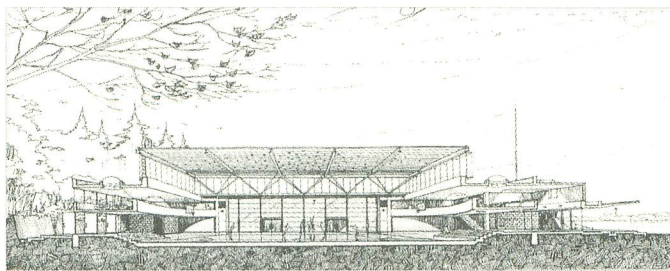


図2 法政大学工学部体育館断面透視図

グラウンドを掘り込み、軽い屋根で覆う。

いが、極めて厳しいものであった。

——フィールド調査による研究

研究では、昭和五六年（一九八一）より法政大学百周年記念事業として行われた「沖縄久米島における社会・経済・文化の総合的研究」があり、文化系の先生方が第一次調査を昭和五四年より文部科学省科学研究費補助金を受けて先行していた。しかし総合的研究を謳い地域や生活をとらえるのに、建築分野が入っていないのは、おかしいのではないかと働きかけたのが、建築学科の山田水城教授と武者英二教授であった。それはお二人から窺った話である。

山田教授には古川修文先生（元法政大学教授）が付き、「民家の風環境と構法」の視点から、そして武者教授には私がついて「沖縄の民家と集落」を研究することになり、武者先生の「海が綺麗だぞ」という言葉とBernard Rudofskyの「Architecture without Architects（建築家なしの建築）」に出てくる与那国島の墓など刺激的な沖縄がみられるかもしれないと思いき即賛同した。しかし、それは大変な調査に突入することになる。

武者先生曰く、沖縄の民家と集落の研究は、初めてで全くわからないので、できるだけ多くの民家、集落を見て歩こうという。「久米島の全集落」を比較すれば、〈久米島の民家、集落は何か〉が見えるでしょうと軽くいうが、結果的にはこれらが悉皆調査になってしまった。それも戸籍調査のごとく、屋敷内建物を全てひろいあげ、一軒毎の調査シートに住所、屋号、家族、規模、建物形状、配置、屋敷林の有無と状況、入口の位置やアクセスのしかた、屋敷の高低差などを基礎データとし、調査担当者の総合的な評価までおこなっている。そのA評価の中からタイプ別に、詳細実測すべきものを議論によって選び、個別折衝、許可が得られたものから詳細調査に入った。集落構成は前もってS・一／五〇〇〇〜一／五〇〇〇〇の地図から抽出し、集落構成の屋敷内配置、主屋、副屋、納屋、家畜小屋、便所、井戸、屋敷神、屋敷林など全ての建物平面図、立面図、詳細断面図まで描いた。そして図面を描く際には、既往

研究資料を集積、そこから分析、集約化した基本図を作成、それを参照しながら実測野帳を作成していった。

ワンボックスカーをレンタル、その車体横に「法政大学久米島調査団」と書いた紙を張り付け、シマ（集落）間を走り回り、学生調査員を移送した。効率よく進めてはいたが、若者はオジー、オバーに気に入られて、お茶菓子や南国フルーツをいただきながらの聞き取りとなるが多々あった。もちろん話好きの先生のこと、アマハジ（雨端）縁に腰かけ仏壇や屋敷神、ウガミのことなど、学生ではわからないことを手帳にスケッチを入れ込みながら書き取っていた。このような調子ゆえに夏休みには、予定の全集落は終わらず、大学も後期に入ってしまった。先生と私は、授業があるので東京に戻ったが、論文化せねばならない学生たちは、データ収集までは終わらせねばと島に残って調査を続けた。全集落を回り終わる頃には、肌寒くなり東京より郵便局留めで衣類を送ってもらおうという印象に残る最初の研究調査であった。

—— 研究の報告と表現

集落の空間構成要素から建築まで多岐にわたるデータを分析し、日本建築学会や日本民俗建築学会に各年の論文として発表していった。それを言語、社会、経済、文化分野の先生方と総合化して著したのが先述した『沖縄久米島の総合的研究』（弘文堂一九八四・四）の発刊である。この研究成果は、文献として残すだけでなく、「久米島の民家展」（一九八三・一〇）として写真や図面、分析図表を添えてビジュアルに表現、記念講演会を行った。展覧会は、久米島のみでなく、那覇（一九八三・六）そして東京（一九八三・一二）と巡回展を開き、沖縄の人たちには自分の郷土を、東京の人たちには沖縄理解のためにと成果報告を行ったことは、沖縄研究の大きな礎となった。この久米島の総合的研究をきっかけに隣の島である渡名喜島、『沖縄渡名喜島の言語・文化の総合的研究』（法政大学沖縄文化研究所一九九一・四）へと繋がっていった。その後、日本最西端の島嶼八重山地方の総合的研究としてわれわれは、民

家集落調査に入った。集落の空間構成を近世まで透かして見ることができると温故学会資料と現在地図類を比較、『沖繩八重山の研究』（共著、相模書房、二〇〇〇・四）を発刊した。先生が退任された後も沖繩研究は永瀬研究室で引き継ぎ、八重山諸島、宮古島、久米島の御嶽を含む再調査、旧琉球王朝時代の領土であった奄美諸島まで領域を広げて、民家、集落の調査を行っている。

—— 建築教育から出版へ ——

研究教育において、武者先生は教師も学ばねばならないと先述した学会活動を続け、建築関係では最も大きい日本建築学会において、恩師の大江宏先生より誘われた「教育懇談会」に参加、議論の成果を『建築を教えるものと学ぶもの』（分担、鹿島出版会、一九八〇・六）に纏めている。建築設計資料の事典的存在である『建築設計資料集』——第3巻単位空間Ⅰ（分担、丸善、一九八〇・七）の部会が一緒に参加した最初である。各種「室」の行為空間としての最小基本的単位とはどのように定義するかなど、徹底して議論し、毎回用意した原稿を修正せねばならなかったことは、私にとって本の作成の仕方における貴重な学び体験であった。

その後、先生は『DA建築図集住宅Ⅱ「木造の小住宅」』（分担、彰国社、一九八二・八）、『現代住宅「玄関まわり」』（分担、毎日新聞社、一九八二・八）、この後の初学者のための建築設計教科書は、準備に三年余りをかけたが、先生と私との共著『建築設計演習基礎編「建築デザインの製図法から簡単な設計まで」』（彰国社、一九八二・一〇）を出版した。最小限学生に覚えてほしいことを図解で表現できないか、それは永瀬のデッサンを駆使すること、一事項を見聞き完結、一年間の授業のプロセスに合わせることで使いやすさをめざす。そして出された本は、これまで類例がなかったのか日本中の四割相当と多くの建築学科で使われ、二〇一二年二月で三七刷り一四五、〇〇〇部ほどが発行され、この類ではベストセラーのようである。そして『男の城の設計図』（分担、ダイ

アモンド社、一九八三、二）、『KATSURA』（分担、新建築社、一九八三、三）、この本は桂離宮のことで一九七六年四月から一九八二年三月までの昭和の大修理が行われたとき、新建築社より図面化の依頼を受け、修復の現場に立ち入ることができた。お弁当持参でゆき書院の畳の間で食べたことを思い出す。『DA建築図集医療院Ⅰ』私立の診療所』（分担、彰国社、一九八三、一二）、『図解建築構法』（後藤一雄・武者英二著、彰国社、一九八五、四）、『コンパクト資料集成』（分担、丸善、一九八六、九）、『現代家相学』（分担、彰国社、一九八六、一〇）。

このように次々と出版を為しているなかで記しておかねばならないことは一九八七年に沖縄文化研究所所長として研究所創立二五周年記念の「古典舞踊の会」、沖縄学市民講座を多摩校舎で開催し好評であったこと。そして一九九二年の創立二〇周年には、再度所長として「記念講演会」・「琉球古典舞踊の会」・「沖縄古文書展」を那覇で開催している。三度の所長（一九九六～一九九八年）を引き受けることになる前年の一九九五年には、『小湾字誌 沖縄戦・米占領下で失われた集落の復元』（小湾字誌編集委員会編）で沖縄タイムス賞、一九九七年に同書で日本地名研究所から風土研究賞を受賞している。さらに一九九八年一月～二月には、国際シンポジウム「アジアのなかの琉球・世界のなかの沖縄」を沖縄と東京で開催し、成功に導いている。二〇〇〇年四月一日に研究所は市ヶ谷2号館二階から現在のボアソナードタワー二階に移転した。その際には建築専門として研究所の配置関係などに尽力されている。

大学を退任（二〇〇一）されたあとも『屋根のデザイン百科』（武者英二、吉田尚英著、彰国社、二〇〇九、八）というように先生は、建築設計の資料となる本を出している。これらのことは設計、教育、研究の三足の草鞋を履きこなしているから、成せたことであろう。

— 同人活動など

また特記すべきことに風声同人（後に風声が燎りよう・かがりびに変わる）の存在がある。ここに到る前段には、武者先生の師である建築家大江宏（元法政大学教授、国立能楽堂設計者）の呼びかけで始まった研究会「プラン70」・ル・コルビジエの弟子であり上野文化会館の設計者である前川國男を筆頭に白井晟一、吉坂隆正、神代雄一郎、大谷幸夫、鬼頭梓、藤井正一郎、大江宏、武者英二、稲葉武司、宮内嘉久二一名の錚々たるメンバーが名を連ね、戦後二五年、建築の意味再考を論じていた。

一九七六年四月の同人誌0号あとがきに評論家の宮内嘉久が述べているが、一九六〇年代後半の荒涼とした日本の風景に、大江宏が「自己修練の場の根本的転換、再建への志向」として点した口火であること。渾沌カオスに形を与えられうるかは、これからの試練として、七名の同人、岩本博行、大江宏、神代雄一郎、白井晟一、前川國男、武者英二、宮内嘉久、発行Ⅱ株、岡澤の同人誌発刊がある。小冊子であるが、中に盛るものはおいしいものとして、建築家のみでなく、評論家や文人、学者、書家、詩人、陶芸家等々の珠玉の文章が座談、復刻も含めて凝縮している。そしてシヤレたカットが毎号目を引いていた。

『風声』が21号、誌名を『燎』と改め26号、通算47号をもって休刊となっているが、この同人事務局を武者英二研究室が受け持っていた。大変な労力を要したであろうことが察せられる。

この同人と前後して建築教育から発して関わった建築家の倉田康男（当時法政大学非常勤講師）が始めた私塾的通称ピンクハウス、高山建築学校（一九七二）のきっかけをつくっている。このピンクハウスや高山建築学校には、哲学者や芸術家ほかさまざまな分野からの識者が講師として参加、現在も夏季に彫刻家の吉江庄蔵氏を校長にして開校されている。

——時間はあつても無きに等しい／時を生き残したもの

三足の草鞋の一つである建築設計は、略歴に見るように法政大学卒業後、菊竹清訓建築設計事務所に入所、設計の原点であるという出雲大社の「庁の舎」の設計監理に関わり、風土と新技術を見事に融合させた傑作をつくっている。そして大阪万博のランドマークタワーまで務めたあと、数年の間において主宰する事務所を立ち上げている。一九六九年の後藤邸に始まる多くの住宅や医院、スタジオ、店舗、事務所ビル、会社寮、大学施設、ゴルフクラブや宗施設など三〜四件／年、一九九三年まで二一年間に一〇四件の建築を設計しており、受賞は逃したが数々のコンペティション（競技設計）にチャレンジしている。私もそのコンペに加わっているが徹夜の連続で時間はあつても無きに等しいものであった。

——海外旅行、山、海へ

このように追想してみると、遊びなどないのではないかと思われるが、武者先生は、法政大学の教員になられたころから海外学生研修旅行を組み、度々ヨーロッパへ出かけた。法政大学の学生や、私が非常勤講師を務めていた共立女子大学の学生達などと、何年かに亘りかなりの国をまわった。その空間体験は、その後の建築設計活動や教育に各処で生かされ顕われている。

年中行事のように、山そして海に学生たちを誘った。草津でのスキーに私も何度か出かけ、山岳部出身である先生の山スキーの堅実さを見せてもらった。また先生は、海が好きで船舶一級免許をとり、ヨットを逗子マリナーにもち、セーリング、トロリーングを楽しまれた。ご自宅では、海水魚の飼育もしており、補充といつては新たな小魚を求めて磯遊びに誘われた。そこでも設計者魂が表れていた。この魚は、すばしっこく捕まえにくい底に潜むもので、そこをすくえばよいが、その時の網の形はこの形が機能的だと手管を伝授してくれた。遊び疲れた後に海辺で食事を

し、ゆっくりと陽が落ちてゆくのをみるのは何とも言い難く、一日の終わりの境界に神が美を創ったということに頷かざるを得ない。先生との沖縄フィールド調査は長く続くことになり、その調査の度に、毎日変化する夕日の景を追って浜に出ている。海も空も真つ赤に染まり、ニライカナイからの至高の光に包まれるときの幸を感じた。武者先生の黙って水平線を見つめる姿が思い出される。それは、先生ご自身の作品集題目に「静かなひかり」ということばを付けられたことにも繋がっているように思える。

「静かなひかり」を求めて旅立たれた。

ご冥福をお祈り申し上げます。

日本民俗建築学会『民俗建築』143号（二〇一三、五）の拙稿―「紙碑」より一部抜粋。



一日の境界に顕現する美（沖縄・久米島） photo: K. Nagase

（沖縄文化研究所報第73号より転載）